

トラベルとトラブル

1) 旅の骨折り

「ところで先生、これってどうすればいいんですか？」

突然先生と呼ばれて戸惑ったのは、ちょっと助言しただけだったし、何よりイエメンに来て既に数日、頭はすっかり遊びモードになっていたからだ。雑踏の市場には乳香の煙が立ちこめ、スパイスの香りあふれるそこは中世はアラビアンナイトの世界、腹帯に半月刀を刺した男たちが、カート（アカネ科の木の葉で軽い興奮作用がある）で頬をもぐもぐ膨らませながら行き交っていた。

差し出されたMさんの手には注射器とバイアル瓶が載せられている。ラベルには抗生物質の文字が読み取れた。

「それ、どうしたんですか？」

「これを毎日注射するようになって・・・」

妻の治療にと注射器と薬液を渡された中年のMさん、医師でも看護師でもなければ途方に暮れるのは当然だろう。左の太ももから足先までギプスを巻かれた夫人は、横たわったベッドの上から不安げに夫を見上げている。

実はM夫人は今日の昼前、見晴らしのよいビューポイントの坂道で小石に足をとられて転倒、下腿の骨を挫いたのだった。そこは3000m級の山々が連なるイエメンの山岳地帯、紅海からのモンスーンが雨季をもたらし、急斜面の段々畑ではコーヒーの女王「モカ・マタリ」が栽培されている。目的地の港町ホデイダまでは道中半ば、まだ150km以上を走らねばならない。もちろん山中に病院があるわけもなく、応急の固定処置を受けてM夫妻と現地ガイドは港町の病院へと先行した。何台かのランドクルーザーに分乗してのツアーだったため、残りのメンバーは観光を続けることができたのだった。

ホテルに到着したのは紅海に深紅の夕陽が沈むころ、病院から帰ったM夫人は部屋で休んでいるという。添乗員と私はフロントに荷物を預けM夫妻の部屋を訪ねた。

「いやー、建物は古い倉庫のようで、人が溢れていて野戦病院のようでしたよ。言葉は分からず、何をされるのかもわからず、心配で心配で……。でも遠来の旅人だからとすぐ診てくれたし、とてもフレンドリーだったのでまかせられるって気になりました」

言葉の全く通じないアラブ人の中での受診は大変なストレスだったのだろう、日本語を喋れるとあってほっとしたのかMさんは饒舌だった。

「これ見てください。記念にもらったから」

差し出されたのは一枚のレントゲン写真。ギプスの中にキチッと整復された下腿骨が写っている。無言の夫人は目を閉じたままだ。

「あとは骨が付くのを待たばいいんですかね・・・」

独り言のようにブツブツつぶやくMさんの言葉に、私は浮腫まないよう足を挙げておくこと、もし骨折部の痛みが強くなればギプスの切開が必要になることを伝え、帰国便はエ

コノミークラス症候群予防にビジネスクラスへの変更を勧めた。

「それにしてもこんなところで・・・」と、ここから首都サナアへ山道を車で300キロ、そこからドバイ、そして日本へと、遥かな帰路を思うと人ごとながらついため息が出そうになった。しかし、旅 **travel** の語源は古フランス語の **travail** (困難、疲労、骨折っていく) に由来するように「旅の骨折り」はあって当たり前、たまたまM夫人は運が悪かったのだ。トラベルにはトラブルがつきまとうだけに、トラベル **travel** とトラブル **trouble** (語源はラテン語 **turbidus** 混乱から心配、困難、骨折りの意) の語源が同じという誤解が生まれたのも無理からぬことだろう。

M夫妻には申し訳ないが、とにかく自分でなくてよかったと思いつつ、「お大事に」と言葉を残して帰ろうとすると、「どうすればよいのか？」と冒頭の質問だった。皮膚に傷がなかったことを確認し、「なら必要ないでしょう」と答えると、安堵の表情を浮かべた夫妻は互いに顔を見合わせた。しかしである。担当医は何のために抗生物質を出したのか、それも経口ではなく注射でなんて・・・、おおらかなのか、いいかげんなのか、腑に落ちないままに部屋を辞したのだった。

ところで、対岸の火事はしよせん他人事、同情しつつも客観的に眺めることができるが、火の粉が自身にふりかかれば話は別だ。不安や焦りに慌てうろたえたのは、ある年の大晦日の夜、中国は福建省の「土楼」に民泊したときのことだった。同行した愛人に予期せぬ持病が起きてしまったのだ。

「土楼」とは文字通り土で作られた楼閣で、唐代末期から清代末期にかけて約1000年間、戦乱を逃れて黄河中下流域から南部の山奥へと、何回かに渡って移動して来た人々によって作られた。「よそ者・客」のため客家と呼ばれた彼らは、地元民や猛獣などの外敵から身を守るため、要塞の目的も兼ね円形や方形の中層集合住宅を作りあげた。それが一般に知られるようになったのは、1960年代、アメリカの軍事偵察衛星が山間に散在する円形土楼をミサイル発射基地と誤認したことによる。今でこそ廈門から高速道を使って3時間で行ける所も、車道が開通したのはつい1991年、土楼の保存状態がよいのは文化大革命の当時、車の走らなかったこの地方に革命の嵐は襲来しなかったからだ。

宿泊した振成楼は築100年、高さ約20メートル、直径数十メートルの円形四階建て、1～2階に窓はなく、粘土で固めた外壁の厚さは約1・5メートル、外観は堂々の要塞である。「東方建築の真珠」「土楼の皇子」とも呼ばれる土楼の1階は台所、2回は倉庫、3・4階には100前後の部屋があり、いずれも同じ広さで7～8畳くらい、往時500人近くの居住者も今は50人前後とのこと。民宿用に提供された部屋には粗末な木製のベッドが2台、他には1階の共同トイレに行くのが面倒な人のため、赤いプラスチックのオマル用のバケツが1個。重ね着した山用の下着の上にさらにフリースの厚いパジャマを着込んだのは、暖房設備がなかったからだ。

どうしてそんなところへ行ったのかと聞かれても困るが、帰国便でたまたま隣り合わせ

た中国人の中年女性から、独特のアクセントのある日本語で質問された。

「どこに行ってきたのか？」

「土楼へ」

「ドロー？ ドローって何だ？ 私は地元の中国人だけど、聞いたことないよ」

ざっと説明をすると、それを聞いていた連れの女性が口を開いた。

「きれいだったか？」

「いや汚なかった。それに暖房も無いし、寒かったよ」

「ヒュー、よくそんなとこ行くね」

顔を見合わせて口をつぐんだ二人に私も口を閉じて同調したのは、もしもドローで起きたトラブルをしゃべれば、あきれて舌打ちでもされるのがオチだと思ったからだ。

実は中国語で愛人は妻の意だが、素朴な田舎料理に添乗員持参の年越しそばが添えられた夕食を終えて9時すぎ、部屋にテレビは無く、読書には暗く、じゃあ寝ようかと準備をしているときだった。防寒用の下着を重ね着しようとした際、寒さで身体が固くなっていたのだろう、妻の左肩が抜けてしまった。昔、何度か肩関節を脱臼したことのある妻だが、この20～30年間はすっかりご無沙汰だった。よりもよってどうしてこんな所でこんな時に、何たるドジ！と怒っても仕方がない。「痛い！痛い！」と苦痛に半泣きの妻を前に、さてどうするか。何人かの脱臼を整復したことはあるが、それは遥かな昔、しかも静脈麻酔下に行ったものだ。痛みと寒さでガタガタ震える老妻の筋肉は固いだろうが、まずはやってみるしかない。何とか成功をと念じつつ寝かせた妻の腕を引っ張るが「痛っ！痛い！」と悲鳴をあげるのみ、3～4回試みるが苦痛を与えただけだった。

妻の苦痛を取ってやれない自分が情けなかったが、もう病院に行くしかない。しかし、こんな田舎に病院があるだろうか？ あったとしても今は大晦日の夜更け、明日からは新正月の三連休だ。当直医はいても整形外科の医者とはかぎるまい。尽きない不安を抱きつつ添乗員のSさんの部屋を訪ねる。たまたまガイドの遼さんと一杯やりながら、明日のスケジュールの打ち合わせをしているところだった。皆で宿の主人を訪ねると、10キロくらい先の町に病院があるという。まずはほっとしたが病院の内容は不明だ。でも一歩前進、希望の灯はともされた。近在にタクシーはないため、日中、観光に使ったマイクロバスの運転手・林さんに出動をお願いする。幸い、彼は酒を飲まない男だった。

私たち夫婦とSさん、遼さん、宿の主人にドライバーの林さんと、6人の乗ったバスは漆黒の闇の中、曲がりくねった未舗装の山道を病院へと向かう。「痛痛！」とか「痛い！」とか、バスが揺れる度に洩れる妻の小さな悲鳴に、この衝撃で整復されればと思ったりするが、もちろんそんな奇貨は得られない。一刻も早い病院への到着を願って、右左に揺れるヘッドライトの先を見つめて誰もが黙ったままだ。

もどかしくも長く感じられた山道を下り、狭い盆地に入ると人家が現われ、やがて街並となった。深夜に近く街路灯に照らされた街中に人影は無い。メインストリートから脇道に入ったすぐ先に病院はあったが、あと数十メートル、工事中でもないのに何故か未舗装

のためバスは止まった。50床位だろうか、二階建ての建物の玄関だけが蛍光灯で明るかった。二階は真っ暗、寝静まった病室なのか、休み前のため空床なのか……。遼さんの懐中電灯に足元を照らされ、そこが駐車場なのだろう、ガランとした広場の凸凹に足を取られないよう玄関へと向かう。

奥から出て来た看護師に、玄関脇のドアの開いたままの待合室に案内された。暖房はない。遼さんの標準語はここでは通じないため、私の説明は遼さんから宿の主人へ、そして看護師に伝えられた。看護師が消え待つことしばし、座っていると寒いので立ったまもうろうろしていると、ジャンパーのポケットに両手を入れた初老の男が現れた。当直の内科医という。ヤレヤレと気の毒そうな表情で事情を聞いた彼は、皆に椅子に座って待つようにと指示、ケータイを手にして私たちに背を向けた。何やら早口でしゃべっていたが、振り返ると整形外科医と連絡がとれたというではないか。「地獄で仏」とはまさにこのこと、思わず妻と顔を見合わせる。「^{シエシエイ}謝 謝」という私たちの喜びと感謝の言葉を受け、彼は軽く手を挙げて消えた。

ほどなく広場の向こうから足音が聞こえ、30代半ばくらいだろうか、坊主頭の大柄な男が現れた。顔が赤く息が酒臭い。何となく不機嫌そうなのは、深夜近く飲酒中のところを呼び出されたからだろう、自分の当直のときもあんな感じなのかなとふと思う。手招きされて全員、彼の後をぞろぞろとついて行く。室外に出て、玄関前を過ぎ、その隣の部屋に入る。そこも入口のドアは開いたまま、暖房はなく、奥にポツンとレントゲン撮影機があるだけだった。妻を撮影台の前に立たせ、彼は操作室に消えたが、そのドアを閉めるでもなく、妻以外を室外に出させるでもなく、あっという間に撮影ボタンが押された。再びぞろぞろと待合室に戻って待つことしばし、フィルムを持参した彼は私たちの「謝 謝」の声を背に、自分の仕事はそこまでとそそくさと消えた。終始無言のレントゲン技師だった。

彼から連絡を受けたのだろう、しばらくしてセーター姿の中年男性が現れた。中肉中背、「仏」にふさわしい穏やかな感じの整形外科医である。脱臼所見の写った写真と妻の顔を代わる代わる見た彼は、

「年齢は？」と妻に尋ねた。術者として当然の質問だ。

「61歳」との答えに、「若いね」と言われた妻は、

「まーうれしい、ありがとうございます」と急にニコニコ。すでに化粧を落としていたスッピンの妻でも、中国同世代の梅干のような田舎の女性と比べれば確かに若くは見えよう、しかし日本では年相応にしっかりと老けている。妻の明るい声と表情に騙されたのか、

「痛くはないのか？」と整形外科医。

「もちろん痛いです」今度は顔をしかめ沈んだ声で妻が答える。

ではと、彼に促されてぞろぞろと向かった処置室はレントゲン室の左隣、つまり待合室・玄関・レントゲン室・処置室と一直線に並んでいたわけで、そこもドアは開いたまま、文字通りオープンな病院だった。暖房のない部屋の奥に木製のベッドが一台、青い縦縞の汚れたシーツの乱れを、看護師はちょっと直す仕草をした。麻酔の準備をするでもなく、彼

は妻にベッドに寝るよう指示した。実は、もし麻酔をするならディスポ針にしてもらわねばと思っていたのは、中国の再生針は消毒が十分でないためエイズ感染の危険があると聞いていたからだ。こんな田舎にディスポ針があるだろうかとの不安は消えたが、さて麻酔無しで大丈夫だろうか？ 私は成功しなかったが、しかし彼は整形外科医、信頼してまかせしかない。一回の施術でぜひ成功して欲しいと固唾を飲んで見守る中、彼は妻の腋窩を左足で固定すると、やおら腕を引っ張った。

「痛っ！痛い！！」

一瞬の絶叫がやみ、脱臼は整復された。私がしたのと同じような方法なのにさすが専門医、「仏」には後光が射していた。

病院からの帰途、交わされる雑談に車内の雰囲気は明るく、時折の振動に「痛い」とつぶやく遠慮がちな妻の声に、もう誰も関心を示さない。自分の施術が成功していれば大晦日の深夜、皆にこんな迷惑をかけなかつただろうと、私はいささか「うれしさも中くらいなりおらが春」だった。土楼に着いたときはすでに夜半も過ぎ、新年の挨拶を交わして戻った部屋は外と変わらぬ寒さだった。

土楼に比べれば帰国前夜の廈門のホテルはまさに天国、広い部屋は暖かくベッドもトイレも快適、ゆったりつかったバスタブでシミジミと文明の素晴らしさを思い知らされた。旅の疲れを癒したらと勧められたマッサージは1時間300元、田舎の病院で支払った治療費はたったの115元（約1700円）で、しかもそれは後に保険会社から還付された。つまり医療費はタダだったわけで、深夜、妻1人のために10人近くもの大人が煩わせられて・・・、「どうして？」と思わぬ人はいまい。せめて心ばかりのお礼をと、妻が「仏」の胡先生に空港で買ったのは深紅のネクタイだった。

帰国後、手にした知人の医師の賀状には、旅先のモロッコで転倒し腰椎を骨折、2か月の入院を余儀なくされたと記されていた。「旅の骨折り」を経験したばかりだったため、わずか1～2行の文字の背景に様々な思いがめぐらされた。

しかしである。妻は不幸にも外国の辺鄙な田舎でトラブルに会ってしまったが、たまたま近くに病院があり、幸い整形外科医がいて、しかも麻酔なしで整復してくれた。もし近くに病院がなかったら、もし麻酔や入院が必要だったなら・・・、同行者にも多大な迷惑をかけていただろう。コトがスムーズに運んだのは何人もの協力があつてこそ、しかも様々な幸運が重なった結果だった。「謝謝」「有り難う」という言葉が何度も自然に口をついて出たのは、心底有り難かったからだ。これも「有ることが難しい」、つまり「めったにない」事故に会って「めったにない」幸運に会えばのことだった。誰も好き好んで「旅の骨折り」を経験したいとは思わない。しかし、不幸にしてトラブルに会ってしまったとき、過ぎ去ってみればそれはなつかしい貴重な思い出に育っている。

「楽な旅は後に残る感銘が少なく、例えば自分でたてた計画が失敗したとき、そこにこそ旅の価値がある」「どの宿にも断られて夜の街をさまようとき、“旅”が正体を現わしてくる。そんな状況を写真にとる人はいないだろう。が、記念写真の対象にならない状況に

おいてこそ、旅の価値は高まる。自分という肉体が寄るべなき存在となること、それが旅
というものだ」(『終着駅』より)と、旅行作家・故宮脇俊三氏は述べている。

「山梨県医師会報」 2010年5月号より 転載